

トルコ東部地震の被災地で医療活動

「防寒用品の援助が必要」

北区 AMDA 医師ら現地報告

トルコ東部地震の被災地エルジシュで活動した国際医療救援団体「AMDA」の医師らが1日、北区で活動報告した。先月31日に帰国した大類隼人医師(30)は「風邪の症状を訴える患者が増えていた。寒さも厳しく、防寒用品の援助が求められている」と現状を訴えた。

【石井尚】

AMDAから派遣さ

れたのは大類医師のほか、刈崎祐一医師(67)は福岡市、トルコ人調整員のアフメット・イユルデイスさんの22人。現地NGOなどの協力を得て、25と29日の間、エルジシュの体育館で診察にあたった。

「夜は雪が降り寒さのため体力を奪われた。被災者はもっとつらく、寒さ対策が必要だろう」と話した。

東日本大震災の時、日本トルコ文化交流会からAMDAの活動した宮城県南三陸町に水2・5トの支援があったため、相互扶助の精神でトルコ支援を決めた。菅波茂代表は「現地の医療機関にどういう支援ができるか1カ月をめぐりに、現地でニーズ調査をしたい」と話した。



左肩の手当てを受けた6歳の女兒と大類医師(左)はAMDA提供

初めは外傷患者が多かったが、日がたつにつれ風邪の症状など急性の低い患者が増えた。大類医師は体育館近くの小学校の校庭にテントを張り寝泊まり